

## 〈第2回研究会〉

日時：2016年4月16日（土）15：30 - 17：30（参加者：21名）

会場：立教大学池袋キャンパス12号館第3・4会議室

テーマ：「ESD（持続可能な開発のための教育）が求める“学び”の論理—失われたものを取り戻す学び」

講師：朝岡幸彦氏（東京農工大学、環境教育・社会教育）

### 講演の概要：

持続可能な開発のための教育（ESD／Education for Sustainable Development）は、新たな教育領域ではなく、グローバリゼーションという時代状況の中で求められる「もう一つの教育」のあり方（ベクトル）である。それは、ビジョン（未来指向性）をもった対話と参画を重んじるものであり、組織・社会としての学びや状況的学習を重視するものである。したがって、その内容は地域の自然や社会・文化・歴史の多様性を前提とするものであり、地域の自己決定を重視すべきものである。そうしたESDに内在する“学び”の論理を「失われた能力を取り戻す学び」と呼び、その事例として「キツネにだまされる能力」を取り上げた。近代以降、学校で「学ぶ（learn）」ことはよいことであると誰もが考えてきた。しかしながら、教育によって失われるものがあること、近代学校教育がそれ以前の社会にあった多様な感性や能力、関係性を否定し、矯正してきたのではないかと考えられる。いま近代の「一つの帰結」としてのグローバリゼーションのもとで、改めて私たちが失った能力を取り戻すことが教育の新たな課題として浮かび上がっているのではないか。

ここでは、①迷信としてのキツネ憑き（井上円了、1904年）、②日本人はなぜキツネに騙されなくなったのか（内山節、2007年）、③「きつねつき」という現象（高橋紳吾、1993年）、④キツネモチの意味（吉田禎吾、1999年）の4人の論説を振り返りながら「キツネにだまされる能力」とは何かを考えた。

その上で、かつて私たちが普通に持っていた「自然とのつながり」や「共同体の他者とのつながり」を意識する能力を、教育の枠組みの中で回復しようとする試みとして、岩崎正弥と高野孝子の「場の教育」（もしくは Place-Based Education / PBE）という概念に注目した。そして、いまも社会には口伝的世界が埋め込まれており、社会には「学び返し」「教え返し」学習過程が存在する。学校に象徴される教授的世界にとらわれず、近代化によって「失われた」教育のあり方に注目することも必要である。ESDが「グローバリゼーションの時代」に〈向き合う〉教育の新たなパラダイムであり、共生社会を支えるものであるとするならば、「場の教育」や「口伝的な学習」への敬意こそが求められているにちがいないとまとめた。

1. 井上円了『迷信解』1904年。

2. 内山節『日本人はなぜキツネに騙されなくなったのか』講談社現代新書、2007年。
3. 高橋紳吾『きつねつきの科学』講談社ブルーバックス、1993年。
4. 吉田禎吾『日本の憑きもの』中公新書、1999年。
5. 岩崎正弥・高野孝子『場の教育』2010年、農文協。

#### 質疑応答

狐物語、お稲荷の世界、妖怪と迷信、ESD の例としての「つきもの」、人間と生き物との関係性、前近代性への疑問、理科教育の内容、「グローバル市民」などに関して活発な議論がなされた。

(文責：河上睦子、古沢広祐)